教科書 Q&A

# イスラーム諸王朝の君主の称号

解説 近藤 信彰

イスラーム諸王朝の君主の称号には上下関係はあるのですか？　スルタン・ベイ・大アミールなどは、どのように使い分けられたのですか？

時代だけではなく、地域・言語・文脈など様々な要因によって、使い分けがされています。同じ称号でも時代と地域によって意味がかわるのはよくあることです。

## カリフ、信徒の長

まず、重要なのは正統カリフ時代(632～661年)からウマイヤ朝(661～750年)を経てアッバース朝(750～1258年)に至るカリフ(アラビア語ではハリーファ)で預言者ムハンマドの代理人を意味し、称号としては「信徒の長(アミール・アルムウミニーン)」を用い、イスラーム教徒全体の指導者を意味していました。ただし、徐々に政治的分裂が始まり、10世紀前半にはエジプトを支配したファーティマ朝やイベリア半島を支配した後ウマイヤ朝もカリフを名乗るようになりました。1258年にアッバース朝が滅んだあとは、さらに様々な王朝君主がこの称号を用いるようになりました。ナイジェリアのソコト＝カリフ国(1812～1903年)もその一例です。オスマン帝国では1876年の憲法でオスマン王家はカリフ位をもつと定義しています。また、現在でもモロッコの王家やアフガニスタンのターリバーン政権は「信徒の長」の称号を用いています。

## アミール

この語はたんに長や軍司令官を指す語で、先述の「信徒の長」のようにどのような語があとにくるかで意味がかわります。大アミールと訳されるアミール・アルウマラーは「アミールたちのなかのアミール」という意味ですが、アッバース朝カリフのもとで936年イブン＝ラーイクが任命され、行政・軍事面での実権を握りました。946年にバグダードに入城したブワイフ朝の君主ムイッズ＝アッダウラも大アミールとして権勢をふるいました。ただし、後述するスルターンという称号が普及すると、大アミールは、ある王朝の最高軍事司令官やさらには州知事を意味する言葉にかわっていきました。後述するようにアミールという語のテュルク語(＝トルコ系諸言語)訳は「ベイ」や「ベグ」(同じ語だが地域によって発音が異なる)なので、オスマン帝国やサファヴィー帝国(1501～1736年)の大州の総督を「ベイレルベイ」「ベグラルベグ」と呼んでいるのも大アミールの直訳です。現在は大アミールを名乗る政権はありません。一方、アミールが君主の称号となった例としては、中央アジアの大征服者ティムール(在位1370～1405年)があげられます。この場合は後述する傀儡のハンとの関係上、質素な称号を選んだようです。彼の子孫たちも、アミールの子孫を意味するミールザーという称号で呼ばれました。現代のアラブ首長国連邦の「首長」はアミールの訳であり、隣国のカタルの君主もアミールを名乗っています。

## スルターン

1055年にバグダードに入城したセルジューク朝のトゥグリル＝ベクがアッバース朝のカリフから得た称号がスルターンで、当初はカリフ制のもとでの軍事的支配者に大アミールにかわって与えられたものでした。これ以降、アラビア語では君主を示す一般的な言葉となり、シリア・エジプトのアイユーブ朝(1169～1250年)やマムルーク朝(1250～1517年)、

北インドのデリー＝スルターン朝(1206～1526年)などで用いられました。現代でもアラビア半島のオマーンや東南アジアのブルネイやマレーシアの君主はこの称号をもっています。オスマン帝国でも「スルターン・スレイマーン・ハン」のように君主の名前の前にスルターンの語を入れるのが一般的でした。ただし、単体でスルターンというとオスマン帝国では女性の王族を指し、君主に呼びかける際にはペルシア語起源でやはり王を意味するパーディシャーという語を用いるのが通例でした。

## ベイ、ベグ、ハン

ここまでの3つの称号はアラビア語ですが、ベイやベグはテュルク語起源です。しかし、11世紀のテュルク語辞書においてすでにこれはアラビア語のアミールにあたるとされていました。トゥグリル＝ベグには用いられましたが、アミール同様、ただのベグやベイにもあまり権威はありません。トルコ史では、オスマン帝国以前のアナトリアに複数あった小国家をベイリクすなわち「ベイの国」と呼びます。サファヴィー帝国では、軍人のなかで下位の者たちにベグの称号が与えられました。

イスラーム世界に入ったテュルク語・モンゴル語の称号ではハンがもっとも有名です。最初にイスラームを受け入れたテュルク系の王朝であるカラハン朝(10世紀半ば～12世紀半ば)がこの称号をおびていました。11世紀の辞書はハンを「テュルクの偉大な王」と説明しています。13世紀モンゴル帝国によって征服された地域のうち、とくにイスラーム化した中央アジアでは、チンギス＝カン(ハン)の子孫のみが支配者となるべきという考えが長く残り、ハンという称号を名乗って君臨しました。具体的には、ブハラのシャイバーン朝(1500～99年)、ヒヴァ＝ハン国(1520～1920年)やコーカンド＝ハン国(18世紀後半～1876年)などです。先述のティムールの例も、チンギス＝カンの子孫でないことから別にチンギス家のハンを擁立し、自らはアミールという称号に甘んじたのです。西アジアでも、サファヴィー帝国君主はモンゴル期由来のバハードル・ハンという称号をもっていました。オスマン帝国でも、先のスレイマンの例のように、最後にハンという語を君主の名につけることがおこなわれました。

## シャー

もっとも、このオスマン帝国の「ハン」は貨幣などにおいては、シャーというペルシア語起源のやはり王を示す言葉と置き換えられることもありました。このシャーという語はサーサーン朝(224~651年)の皇帝がシャーハンシャー(王のなかの王)と名乗ったようにイスラーム以前にさかのぼりますが、イスラーム王朝の君主が用いることもありました。先述のブワイフ朝は大アミールの称号のほか、自らシャーハンシャーを名乗り、貨幣にもこの称号を刻みました。中央アジアのホラズム地方の支配者は、イスラーム初期からホラズム・シャーという称号を名乗る伝統があり、11世紀末にセルジューク朝に任命された地方総督が自立した王朝(1097～1231年)もこの名前を用いました。ほかにもインドのデカン高原に成立したクトブ＝シャーヒー朝(1518～1617年)、アーディル＝シャーヒー朝(1489～1686年)などが同じパターンです。他方、王朝名ではなく、君主個人の名にシャーという語が入っている例もあり、ムガル帝国のシャー＝ジャハーン(在位1592～1666年)などがその例です。

しかし、シャーが君主の称号として確立した例は、サファヴィー帝国を待たなくてはなりません。かつては、「シャー」という称号の採用を古代イランの伝統への回帰とみなす見解がありましたが、とくに名前の前につけるシャーはスーフィー聖者が用いた称号でもあり、現在では帝国の母体となったスーフィー教団との関係が重視されています。ただし、帝国の滅亡(1736年)以降、後継の王朝は明らかに「シャー」を君主の称号として用いており、「ハン」を名乗っていた人物が即位後に「シャー」を名前の最後につけるのが通例となりました。この慣行はイランやアフガニスタンでは20世紀まで残りました。

以上のように、言語、時代、地域によって、称号のもつ意味づけは異なっており、同じ君主に複数の照合が用いられたり、同じ語でも文脈が異なれば意味が異なってしまったりします。しかし、それであるからこそ、逆に君主の称号は歴史の文脈を読み解く手がかりにもなるのです。

(こんどう・のぶあき
／東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授)